タクシードライバー

iris Gabe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
タクシードライバー

【Ｎコード】
Ｎ５４４６Ｆ

【作者名】
ｉｒｉｓ　Ｇａｂｅ

【あらすじ】
誰もいるはずのない夜の人形峠。冷たい雨にもかかわらず女が一人佇んでいた……。（８分）

その時、九十九(つづら)折りの県道には天空の闇から垂らされた美しく幻想的な霧のカーテンが立ちこめていた。ヘッドライトが乱反射して前方が全く見えなかったが、俺は一向にスピードを緩めなかった。こんな夜更けに、このような田舎道をうろつく輩が、一体どこにいるというのか。そこは、人は固(もと)より獣さえも滅多に姿を現さない淋しい峠道だった。俺が運転するタクシーは悠々と坂を進んでいった。

つい先程、俺は上川村の役場まで客を一人運んできた。上川村は深い山で閉ざされた小さな集落で、たまに客の依頼がある。仕事を済ませた時刻はそこそこ遅かったが、さすがにこの村に泊まろうという気は起こらないので、俺は隣県の下原町へと戻ることにした。上川村と下原町を直接連結する道路はここだけだ。通り抜けに小一時間はかかる狭くて険しい悪道である。

心配していた雨がとうとう降ってきた。ぽつりぽつりとフロントガラスに打ちつけた水滴が、瞬く間にけたたましい本降りの秋雨と化した。だらだらとした登りも残りがわずかになってきた。間もなく県境の『人形峠』にさしかかる。

人形峠――、

上川村と下原町の中途にある閑散としたこの峠は、誰が名づけたのか古くからこの名前で呼ばれていた。かつては交通の要所だったかもしれないが、少し北に広くて立派な国道が造られた途端に誰も寄りつかなくなってしまった。

それは、突然の出来事だった。

ヘッドライトの前に、人間が飛びこんできた！

咄嗟に急ブレーキを踏んだ。

が、しかし――、やっちまったか？

いや、衝撃は……なかった。

多分、大丈夫だ。

……

勇気を奮って、俺はうつ伏せた顔を上げてみた。すると皓々(こう)としたヘッドライトの中に、傘も差さずに突っ立っている人影が見えた。

驚いたことに、それは若い女だった！

女は長身で、すらりと痩せていた。ストレートの美しい黒髪が肩甲骨の辺りまでかかっていて、しっとりと艶やかに濡れていた。長く伸びた前髪は女の目元を完全に覆い隠していた。たとえ瞳が見えなくても、この女が別嬪(べっぴん)であることは間違いなかった。雪のように真っ白な小顔に、真一文字に閉ざされた唇に塗られたルージュがひと際映えていた。腰にはピッタリとフィットしたセクシーな黒いスカートを纏(まと)い、薄手のブラウスは胸元のボタンが乱されて襟が少々開いていた。自殺でもしようとしていたのだろうか？　この女からは、生気というものが全く感じられなかった。

ひとまず俺は、後部座席に女を招き入れた。運転席に着くと俺は、バックミラーで女のようすを確認しながら、静かに訊ねてみた。

「こんな夜にお一人で。ひょっとして何か事故にでも会われたのですか？」

「……」

女は無言のままだ。仕方ないので、型通りの質問に切り替えた。

「お客さん、どちらに行きましょうか？　このまま下原に向かってよろしいですか？」

その時だ。女の艶(なま)めかしい唇がゆっくりと動きだした。

「そっちの方向には『あの人』がいるの。だから――そっちには行きたくないの」

まるで意味不明だ。「じゃあ、上川村に参りますね」

俺は、渋々女の要求に従った。もちろんこの期に及んで上川村などに戻りたくはないが、ここは仕方ない。Uターンができるわずかなスペースをようやく見つけ出して、元来た上川村へと俺はハンドルを切った。

途中しばらく俺達の間に会話はなかった。痺れを切らした俺は思い切って女に話しかけてみることにした。
「いやあ、さっきは驚きましたよ。あんな時刻にあんな淋しい場所で。私はてっきりお客さんが幽霊じゃないかと思いましたよ。はっはっはっ」
軽い冗談のつもりだったが、女は真面目に「そうね、きっと私は幽霊なんだわ……」というと、細い両肩をさらにすくませた。
「あ、悪い冗談で、失礼しました。そんなつもりで申し上げたのでは――」なんという間の悪さだ！
戸惑う俺を尻目に、女はか細い声でとつとつと語りだした。「ねえ、運転手さん、あなた――紐で首を絞められたご経験はある？多分ないでしょうね」
突然何をいい出すのかと思ったが、とりあえず平静を装って俺は答えた。「ええ、もちろんそんな経験なんてございませんよ。まさか、お客さんはおありですか？」
「そうなの、あるのよ……」
どう反応してよいのかわからずに、俺は困惑した。すると女は生々しい話を語り出した。

「あの人は背後から急に襲ってきたの」女の口元がかすかに緩む。「最初はね、紐がぐいぐいと食いこんできて、皮膚が擦り切れて血が滲み出したわ」
女の襟元からは白い首筋が露出していた。よく見れば喉元に黒いあざが残っている。「痛さを我慢して、紐を解こうと、紐と首の間に何度も指を差しこもうとしたわ。でも、絞める力は遥かに強くて爪さえも入らないの」女はここで微かなため息を入れた。「顔が充血して、だんだん息苦しくなって。だめだ、このままじゃ殺されちゃう！　私は紐を解くことは諦めて、あの人の顔に爪を立てて抵抗しようと思ったわ」

ほっそりとした首筋の先には、美しく整った形状の女の鎖骨が見え隠れしていた。「でも、遅かったのよね。その時にはもう力が入らなくて、この爪があの人まで届かなかった……。私はただ手足を捻じ曲げてもがくだけだった。すると、あれだけ苦しかった痛みがふっと消えてしまったの。あー、このまま死んじゃうんだ。意識はここで途切れたわ」

「はあ……」無理やりに俺は相槌を入れた。こんな時にはそんなことくらいしかすることがないだろう。

「気がつくとね、シャンデリアの灯りがぼんやりと見えたの。不思議な心地だったな――。私は今、無事に生きている？　どうして？　でも、絞められた頸部は神経が切れたみたいに感覚がなかったし、つぶされた喉からは声が全く出なかった」

ここで、女は少しだけ顔を持ち上げた。ミラー越しに俺に向かって、女が微笑みかけたように思えた。気づかぬ振りをして俺は運転に集中する。

「でもね、その時なの……。ねえ、運転手さん、その時の私の怖さがあなたにわかるかしら？　シャンデリアの灯りをさえぎって私を見下ろしているあの人の黒い顔……」

俺の背筋にビクリと震えが走った。

「あの人は異常に興奮していたわ。意地の悪い笑みを浮かべて、こういったの――

『お前のような女は簡単に殺すだけでは勿体ない。今度は俺のこの素手で……、お前の苦しみを直にこの素手で感じながら……、恐れおののくお前の断末魔を全身に感じながら……ゆっくりと……楽しんで……殺してやる！』

あんなに嬉しそうなあの人の顔を今まで見たことがなかったわ。あの人のたくましい身体はわなわなと震えていた。そしてあの人の太い指が無抵抗になった私の頸に……」

ごくりと唾液を飲み込んだ俺は、額にこびりついた脂汗をぬぐった。「それでも、今あなたは無事でここにいらっしゃる。何があったのかは知りませんが、とにかくよかったですね」

その時だ。俺の全身がいきなり硬直した！　ハンドルが操作できない！　ブレーキを踏みたくても足まで感覚が麻痺していた。車は下り坂をどんどん加速していく。そして前方からは対向車のヘッドライドが……、まさか――こんなタイミングで？　対向車は大型のトラックだ。ハンドルが俺の意に反して引きつけられるように右に切れていった。俺の車はトラックの前に飛び出した。真っ白な光に包まれて、俺の意識が叫んだ！　「もうだめだ！」

気がつくと、俺はハンドルに伏せていた。生きているのか？　あのトラックは……いない。ここは、一体どこだ？

「どうかしたの、運転手さん？」

さりげなく女の声がした。反射的に俺は応答した。「あ、すみません。すぐに車を動かしますから……」

俺は再び車を走らせた。

なぜだ？　俺はトラックの前に飛び出したはずだ。しかし、今こうして無事に生きている。あの女も……生きている？

はっとして、女の姿を確認しようと俺はバックミラーを覗きこんだ。しかし後部座席に女の姿はなかった。どこにいる？

「どうしたのよ、運転手さん？」また、女の声がした！　俺の隣から……？

口元に笑みを浮かべて女は助手席に座っていた。そしてハンドルを握る俺の手の上に、ほっそりとした右の手をそっと添えてきた。白くて柔らかな女の手のひらの感触が俺を包みこみ、一瞬俺は性的な興奮を覚えた。

「お客さん、危ないですから、辞めてください！」

女の力は異常だった。ハンドルが動かせなかった。タクシーは再び制御不能に陥った。その時女の身体が小刻みに震えていた。

「こんどは私のこの素手で、運転手さんの恐怖を直に感じてみたいの。いきなり殺しちゃうのは勿体ないものね……」

はじめて女はその前髪を掻きわけた。見覚えのあるあどけないつぶらな丸い瞳が俺を見上げていた。美しかった女の口は耳元まで大きく裂けていた。

最後に彼女は一言つぶやいた。さも嬉しげに、

「ねえ、あなた……」

（完）

（後書き）

ずっと昔に書いた作品ですが、この度文章のリニューアルしてみました。
ご感想をお待ちしております。（ｉｒｉｓ　Ｇａｂｅ）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5446f/

タクシードライバー

2010年11月18日22時04分発行